

## 七曜 十二ヶ月の成り立ち

～認知言語学による大和言葉祖語へのアプローチ (その2)～

岡林みどり

### 目次

1、はじめに ; 汎ユーラシアという類概念	1 p
2、暦 <sup>れき</sup> について考える	2 p
3、数 <sup>すう</sup> 12について考える	4 p
4、十二ヶ月の成り立ち	9 p
5、七曜の成り立ち	11 p
6、十二支とイザナギ・イザナミの回り方の故事	13 p
7、白虎と寅の関係	14 p
8、二つの二上山	15 p
9、イシス神とは何か	16 p
10、汎ユーラシアという類概念から見る日本語	18 p
11、元始、女性は〈孕亡〉のメタファであった	20 p
12、全体のまとめと用語表	21 p

---

### 1、はじめに ; 汎ユーラシアという類概念

汎ユーラシアという類概念はそれほど突飛ではないのだが、日本語数詞が中国語はもちろんタミール語とも相関を見出せないとなると、日本語は孤立語であり、世界の中の孤児であるとなってしまふ。だが、それは見かけの相関だけを見てきたからではないだろうか。深層にあるもの、すなわち諸々のシステムをそのように在らしめている設計思想というものを仮構すれば、それなりの普遍性が見えてくるのではないか、というのが本論考の出発点である。

この問題に立ち入る前にこの1万年の歴史を大雑把にくくるために、以下のような三本柱を仮構しても大きな異論は出ないであろう。

- ①量観念と序観念とのせめぎあい
- ②月齢観念と年周観念とのせめぎあい
- ③十進法と十二進法とのせめぎあい

## 2、<sup>れき</sup>曆について考える

学校理科では、太陽曆の一年を 365.25 日と教え、4 年に 1 回の閏年の説明を行って、それ以外の<sup>れき</sup>曆は月齢との折衷の程度と方法の違いとしてしか説明しない。だが純太陰曆から現在の曆にいたる経過はそのような単純な道筋ではなかったはずである。その過程では長期的妥当性、合理性、簡便性、序と量といった概念がさまざまにせめぎあい、それぞれに固執する部派のイデオロギとわかちがたく結びついて多くの抗争と和解を生み出してきたはずである。その抗争と和解の歴史が現在の曆に反映している、つまり曆を成り立たせているとすれば、それを子供たちに理解させることこそが、平和教育の大事ではないだろうか。

百科事典レベルの知識から考察すると、年周を太陽軌道とだけ関連づけて今日の曆概念が成り立っているとは考えるべきではない。というのは北斗の回転は日周よりも一日 4 分早いことから、北斗の年周は略 364 日である。であれば古代インドの 7 曜 13 ヶ月(364 日)というのは超合理的な系である。一方、365.25 を切り上げて対位を  $30+31=61$  とした前 8 世紀には成文化されたロムルス曆 ( $61*6=366$  日)もなかなか合理的である。それは、太陽年周とのずれが生じるので日曆は 10 ヶ月しか公開しないで、春分の日を基点に毎年初月の初日をお上<sup>こよみ</sup>が公布していたというのは実用から考えると完全なシステムである。しかし、これでは時間を量化して永遠を数量化したいと考えるとまったくもって不全なシステムとしか考えられない。つまり永続する帝国という理念からは克服すべき不全となる。

それで 1 年を 12 ヶ月とする方式が世界中で採用されると同時に 1 ヶ月の日数に関してさまざまな方式が試行錯誤されたに違いない。というよりも歴史上いろいろ存在した方式を折衷して世界帝国ローマにふさわしい曆ができたと考えるのが合理的である。それに異を唱え続けているのがマホメットを継承する部派である。整理すると以下。

- ① 【29+30=59】；月齢のみ ( $59*6=354$ )
- ② 【30+31=61】；月の大小というイメージを踏襲 ( $61*6=366$ )
- ③ 【28】；月齢と無関係に、七曜で割り切る ( $28*13=364$ )
- ④ 【36】；月齢と無関係に、六曜で割り切る ( $36*10=360$ )
- ⑤ 【30】；月齢と無関係に、<sup>ごとお</sup>五十日で割り切る ( $30*12=360$ )

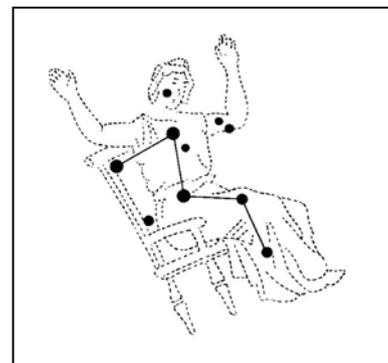
上のように整理するとすぐに気がつくのは民衆の生活から見たとき、年曆の導入は、季節にさほど影響されない都市の生活者にとっては、生活の区切りとして、〈人為としての週曆〉の導入が実際上の利をもたらしたということである。それゆえ多様な方式が部族・部派ごとに好まれて、それなりに現在でも生き残っている。日本で言えば、為替決済は 5 日、お骨の焼き場は 6 日、役所は 7 日となっている。アメリカでは週給制というのも残っていると聞かすが、日本では日給制と月給制の併用であるのは週曆が三本立てだったからインフラとしては使いにくかったからである。

これを、明治維新の設計者たちが多層構造を積極的に残すべきだと考えていたからと見ることは合理的である。というのは古代天皇家の紋が五三の桐であったのに対し、中世以降、宗門家では五七の桐を用いるところがでていたし、現内閣の徽章も五七の桐であるからである。

「五七の桐」の含意は「六」である。具体的にはカシオペア座と北斗七星によって「北極」が暗示される。ところが学校理科がカンマ以下の余計なことばかり子供の頭につめこむから、このことがわかりにくくなっている。その結果「北極星は北極ではない。神の象りは神ではない」という大事なことを理解しないまま大衆教育の終点を通過してしまう人のなんと多いことか。かくいう筆者

も最近やっと認識したばかりである。

北極星など薄ぼんやりして見えにくいのため、実用上は頻用されたとしても、栄光ある象徴にはふさわしくない。それよりも五卯のカシオペア座（ギザギザ）と北斗七星（トケイ）によって「六面の the 一体、つまり見えない唯一の存在」が象徴されると考えるべきなのである。つまりは trinity が、そのようなものであるとすればユダヤ・キリスト教など怖くはない。和魂洋才で十分に太刀打ちできると考えたのは洋風かぶれの浪人がはじめてではなかったはずだ。景教の盛んな長安から帰国した空海も三浦按針とともに家康が信頼した天海もそのように考えたはずである。



数六についてもここ数年考えてきているのだが、今一そのメタファがつかみきれなかった。が、五三の桐のメタファを読み解くことでヒントがえられた。京都に行けばすぐわかることだが賑わう四条通りの徽章は「三雷文と五弁の桜」。含意は「どん詰まりの八坂神社にはスサノヲが在まする」。

三条は牛若が襲われた魑魅魍魎山賊の出没地。五条は卑しい夕顔の住処。「スサ」の隠すものは「シ四」で「三雷文と五弁の桜」が隠すものと重なる。だとすれば四条はスサノヲの在宮を含意する。

3	4	5
三雷門	四条	五弁花
	スシサノオ	

一方、卑しい夕顔の娘「たまかづら」は、黒髭の大將に見初められ、光源氏の息女として、武門の最高位に嫁することとなる。これはすでに象徴数7をになう権門家が象徴数5を割り当てられていた武門よりも上位にあったことを含意する。そして光源氏が通うのは六条の御息所である。

5	6	7
夕顔	(御息所)	頭の中將
黒髭の大將	光源氏	玉蔓

だとすれば、「the 一体」とは「十二光仏に守られて息する the 六面一体」となる。それは無限に広がる「六条河原＝お骨の拾い場」として今に伝えられる。そして観光地図で見ると、京都には「六条通り」と呼べるようなまともな筋は見つからない。やはり〈六は見えない〉が貫徹している。

ここで思い出しておかなければならないことは、当時、現在よりもはるかに夜空に親しんできた人々にとっては「息するメタファ」は、現在の我々には想像もつかないほど「恒星の瞬き」と直結していたことである。その「瞬き」は漢字体系においては文字通り「生ずる日」、すなわち瞬間瞬間の「生の繰り返しの積分量である時間量〈トキ〉に対抗する瞬間時間〈マ〉のメタファに、会意字〈星〉は直結しているのである。

そして現代日本では山奥に行かなければ体験できなくなっているが、星は降るものでもあった。周回する星座は不変であっても、個々の星は降るもの、生ずるものであった。そのことを古代に思いを馳せるときには忘れてはならない。もう一つ思いおこして起きたいのは降る星の光であれ、日の光であれ、光は雨同様に浴びるものであったことである。これを忘れると「あめつち 48 音詩」や「ひかりのどけき」の歌の持つ意味の重層性、あるいは視覚と皮膚覚の共感覚を理解できない。

あばれる	あびる	あふ	あへる	掘る・ぼる	おぼゆ
あまねく	あみ	あむ	あめ	漏る・盛る	おもふ

次は「54 帖」の含意が問題になる。ここでやっと『説文解字』が「540 部立」だったことが繋が

ってくる。というより繋げるためには「千一夜物語」が必要になる。七曜では 28 日なのだから夜は 27 夜である。この数えはヤマトタケル以来の日本の正統である。物語は夜のものだし、月をまたぐ夜は真っ暗闇をメタファにもつからお遊びはなしで、27 が底数になる。これの倍数 54 は、書記体系にも持ち込まれるべきだというのが漢人の考えだったのであろう。一方、古代インドでは dawn とともに 1 日が始まり、次の夜の dusk で一旬する。だから「千日千一夜」。そして当然 dawn とともに down するのは太陽であって、月ではない。

天海は、この数えを頭わずと同時に隠すために東海道に 53 次を置いた。その含意は実体である道を 54 単位置くと、休憩所は 53 必要で、各人は出発地から目的地までそれぞれだが、誰もが、あわせて 55 処をとおって旅を完結するのである。京都の三条が慣用的には終点とされてきたのは倍数の 6 が宗門家のメタファだからである。

ここまでめぐってくると七曜のもう一つの顔がはっきりしてくる。これは 15 夜 14 日を踏襲してその半分を週暦の底としたものである。だからこそ多くの地域部派に受け入れられる素地を有していた。当然運用にあたっては 13 ケ月目は民衆からは隠されて、お上が、初月の初日を布告する古代ローマ同様の体制で運用されていたものと考えすることは合理的である。

とすれば③④の 360 日体制も、どのミチ、どこかで日数調整をしなければならぬとすれば、5 日前後を調整用に当てるというのも、きわめて合理的なシステムだったことになる。これにより〈数をえる〉作業と升目計算とを統合できたのである。今に至るまで解析幾何は円周を 360 度とおいているのも理である。

だが、そうすると〈360〉と〈540〉との異同異が問題になる。現在いえるのは以下の事実だけであって、その含意にはついては考え中である。

- $36 = 3 * 3 * \underline{2} * 2$
- $54 = 3 * 3 * \underline{3} * 2$
- $540 - 360 = 180 = 30 * 6$

最後に、もう一つ思い出しておきたいのはヤマトタケルの〈9 夜 10 日〉の故事は遠征 campaign 中の数えであることだ。留守宅はともかく農民や漁民は日数をえなくても月齢をみて大体のところを知っていけば日常生活には困らなかつたはずである。だが、徴用されて出征するとなれば、あるいは軍備を整える logistics となれば別である。正確にどのくらいの食料を自分で用意し、あるいは軍からあてがわれるのかは重大問題となる。そこで〈人為としての日数概念〉が民間にも普及していった、あるいは支配層によって教化普及がはかられたのである。

### 3、数<sup>きう</sup>12 について考える

それではなぜ、月数 12 が世界標準になったのであろうか。淘汰された月数 10 はどのような象徴力を有していたのであろうか。このことを考えるためには学校教育ですりこまれるいくつかの予断を断ちきる必要がある。

学校理科ではカシオペア座を W 型としてのみ子供たちにすりこむが、abc 字を知らない地域部派ではそれ以外の認識のしかたがあつたはずである。まず星座というのは物語文化の所産なのだから、それ以前には夜空はどのようなものとして見ええたのか、という問いが必要である。

そのために物語よりも以前に、数象徴が世界中の地域部派で共有されていったと考えることは合理的である。このとき古代におけるグローバル・スタンダード図形が永らく星座であつたと仮構す

ることも合理的である。なぜならあらゆる部族・部族内階層、とりわけ文字も読めず紙や羊皮紙を持たない時代・部族・階層にも共有され得るのは大空に輝く図形だからである。

そして、数概念の古層を探ると、なぜか現在の我々が整数を1を単位としているのに対し、古層では奇数偶数の判別が重要だったと感じられる。この直感が正しいとすれば古代より大空に認められた数象徴は〈1・3・5〉でそれぞれ〈シリウス・オリオン・カシオペア〉であったと考えることは無理ではない。そして最大数が〈5〉の時代が永く続いたと考えることも我々の5本指が思考力・解析力を行使する上で必須であることから合理的である。

次にこの三つの数象徴を人工物の上で扱う方法、つまり描図法について思考をめぐらすと、実にいく通りもの扱い方があることに思いがいたる。主な考え方を以下に例示する。

数象徴	1	2	3	4	5	6	7
点図形	・		∴		∴∴		七つ星
星の図形		三ツ星		カシオペア座			
描図	○	V	▽	M W	(X) ▽▽	▽▽ ∞	

時代がくぐれば上のような記号自身の中で広く認められたカタチが自立して人々の生活の中で意味を獲得していくようになるのはこれまた自然の成り行きである。そしてその方向には大きく二つがあるとも考えることも合理的である。すなわちアナログ的とデジタル的の二者である。アナログ派は真円・正方をメタファとする描図にこだわり、デジタル派はある時期に現在のサイコロに描かれた点図に収斂した。が両者の間には交流と対立があって、歴史的には部族部派によってさまざまな形が優勢になったり衰微していったと仮構して可能性を見てみる。現在頻用されている記号から見繕ってみると以下。

アナログ	・	:	∴	∴∴	∴∴∴	∴∴∴∴	∴∴∴∴∴
記号	○	I	∠ △	▲	X	IO	●
立体描図	中心	半径	中心角	三角錐	ピラミッド	五角錐	亀甲錐
単サイコロ	・	∴	∴∴	∴∴∴	∴∴∴∴	∴∴∴∴∴	
記号	ノ	ソ	ツム	ク ロ	メ ヌ	エ タ	
双サイコロ	∴∴	∴∴∴	∴∴∴∴	∴∴∴∴∴	∴∴∴∴∴∴	∴∴∴∴∴∴∴	
記号	一	ニ 口	三 日	三 目	(十)	(隹) 用	

上の図を受け入れるためには学校国語がよってたっている「カタカナは漢字の部品からつくられた」という予断を捨てなければならない。筆者が言語学の勉強していて不思議だったのは誰も柳田国男や折口信夫がなぜ沖縄やアイヌの言葉にこだわったのかに気をとめていないことだった。日本語の古層が日本の周辺に残っているとするのが正しいならば、中国文化圏の周縁にある日本には中国語の古層が残っていなければならない。だとすればカタカナが漢字の古層を残していると仮構することは合理的である。

事実、坂東武者の後裔である藤堂明保がこよなくこだわったのは〈工〉であり、北陸出身の白川静では、日本は対岸の朝鮮半島からの漢字の洪水を俟って文明国入りしたと言う予断によって気がついていなかったか、あえて触れなかったのか不明ではあるが、お気に入りの〈サイ〉に最も近い日本字は〈夕〉である。とすれば五条にすむ夕顔は〈5・6〉の数象徴を担っていることになる。

つまり源氏物語においては、漢字〈多おほ〉は〈10・12〉を含意していることになる。

さて、さらに脱線めくが、ここで和風の数えについて検討してみる。〈ひふ〉〈みむ〉〈よや〉のそれぞれが音韻相通していることは誰でも気がつくが、それ以上に踏み込んだ考察は見かけていない。これは〈よや〉が〈神よ・坊や〉のように身分の上下への呼びかけを弁別していることがわかると素直に読み解ける。これによって空間名〈左・右〉と二つの動作対名〈前へ伏す・後ろへ向く〉〈上へ呼びかける・下へ呼びかける〉と関連づけることができ、現代日本語の成り立ちをより鮮明にしてくれる。つまり、この段階で〈左・前・右・後〉という**自己中方位**の概念とその名称は日本語にきちんと定着し、それが継続していると考えることができる。

だが上下を入れた立方概念は、その後の社会で重要になる**相対方位**との関係で複雑になり、現在はまとまった名称群として取り出せない。結局和風の数えは中国からの数えが入ってきたときか、その後に対語として普及していた語彙を転用したものとするのが合理的である。その時期は底数が6から10に変更になった時期と考えるのが妥当であろう。

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
数え	ひ	ふ	み	よ	い	む	なな	や	ここ	そ
イメージ	左	伏す(恭順)	右	上へ		ソ向く		下へ		

そしてものの本によると、古事記の神代には数七も数九も出てこないというのだから、この時期にあると古事記を書いた人々は考えていたと考えることができる。そうすると古代においては残りの〈7・9〉と〈5・10〉が対数として扱われていたと考えることができる。それでそのような予断で漢字を眺めると〈七・九〉の形は明らかに対として設計されている。そうすると〈なな・ここ〉の音韻がどういうイメージを持っていたかは現代日本語のオノマトペア〈こなごな〉から導くことができる。量の多さではなく分割の多さを顕していたのである。これは〈千・ち→ちりじり〉を導くのと同一方法である。

そうすると、次に疑わしくなるのが学校算数でまず教え込まれる「 $1 < 2$ 」という予断である。これは漢字の深層を探っていくと見えてくるのだが、漢字系では〈二〉は必ずしも〈二倍〉ではなく〈二分の一〉と解釈しなければならない場合があることに気がつく。結局、これは同じ〈二倍〉でも〈量と序〉ではイメージがまったく違うことを意味している。だから漢文では日本語以上に数助詞や量詞が発達しているのである。

さらには、これもここ数年考えているのだが〈5い・10そ〉がもっている音韻イメージは読み解くのが難しかった。しかしカシオペアの記号が〈X〉であるならば数段階の変換でイメージを得ることができる。ギリシャ数字は〈X=10〉で、フランス語では〈20〉が重要な対位であったことが化石化している。が、シュメールでは〈X=15〉であるから、月齢数〈30〉の半分の1単位ということになる。中国でも日本でもそうであるが行政の単位は5であるから、この〈い〉は10を対位とする系における〈いち単位〉の意味と考えることができる。

	五い	七なな	九ここ	十そ
イメージ1	のの(星々)	なな	こそ(強)	そこ(底)
呉音	ゴ	ジツ	グ	ズ
イメージ2	ぎざぎざ(星座)	なごなご(のこ鋸)	こなごな	さきざき(先々)

そして中国語〈五ウ〉の古層には日本語音韻としての〈五ご〉が呉音として伝えられている。そうであるならば〈五十〉→〈ご・そ〉→〈こ・そ〉→〈こそ・そこ〉→〈そ・ご〉→〈十五〉を仮

構できるようになり、そのことにより現在の4つの数詞が二系列のイメージの混交であることが見えてくる。そのためのポイントは逆語序対と音韻相通とオノマトペア〈ぎざぎざ〉の三つである。

それとともに現代日本語では〈十〉は〈ト一〉という音韻が頻用されているわけだが、この変化には二つの理由が考えられる。一つは〈そこ→トコ〉で、和室の床の間は一段高くなっている。これは〈とこ・たか高〉が音韻相通しているからである。が〈床〉には〈畳の下〉の意味もあるので、意味の変化はおきずにより明瞭な音韻に変化して、最後であることをはっきりさせるようになったとも考えられる。それと〈遠い・先々〉という二重の意味を〈十〉が持つことは、**時空は一体不離**という認識の原理からは合理的である。さらに言えば〈そこ底〉〈とこ床〉の分離は依然〈下方〉の意味があっても〈底知れぬ底〉よりは「はるかに下の方」という感じが薄らいでいるから、〈十〉が最大数でなくなって、千だの億だのはては兆等の数字が跋扈するようになった時代の趨勢にふさわしい変化である。

結局、上の結果から言えるのは「和数え」は、1から10までが一度に数の名称として形成されたのではなく、むしろ**陳述文**の中で重要な〈こそ・そこ〉対が〈九・十〉にあてがわれて、それ以外の対語が組み合わせられて、以下の十進法が完成したと見るべきである。それが長音表記法が未整備だったある時期に二重音表記が採用されたものが規範化されて「なな」「ここ」などの音韻が正音とされて化石になったのであろう。それは濁音表記法がなかった時代の文献を根拠に、物知り顔に「濁音韻」を正調の日本語から排除しようとする現代日本でも一定の力をもつ勢力の前身にあたる人々のものの見方・考え方である。ただし、一方で正唱規範がなければ口語は限りなく濁音優勢になりやすく意味まで不明瞭になりやすいのだから「語頭清音」のような規範の導入喚起は起きるべくして起きた、優れた教化運動であった。

なお、空間名〈左右〉は潮汐現象〈ひき汐・みち潮〉を古層に従っていると断言しても現代日本語話者の直覚を逆なではしないであろう。さらに異論輩出を承知で仮構すれば〈7・9〉も読み解ける。

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
数え	ひー	ふー	みー	よー	のー	むー	なー	やー	こー	そー
外延	干き汐		満ち潮		行くノ		行くナ		ここ	そこ
内包	天為		天為		疑問・拝復		推量・禁止		直示	直示

ここで補足すると、〈ひ・ふ〉よりも〈ここ・そこ〉を日本語における古層と判断したのは〈語頭ひ〉の語彙があまりに多く、組織的な導入が図られたと考えられること。これは本論では立ち入らないが、当然古層に別の音韻体系があったという仮構を導く。

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
語頭	ひー	ひき	ひき	ひく	ひら	ひらく	tびら	ひらめく	ひかり	ひがし	ひだり	ひ	ひし	ひね
義	一	四人	干き	退	平	開關	扉	閃	光・火	東	左	日	菱未	旧
対義	二	彦姫	満ち	進	凸凹	閉塞	門	翳	闇	西	右	月	丸	新

さて、ここまで、頭をほぐしておいてから、最後にずっと気になっていたことを考えてみる。それは筆者には旧暦の月名を繰り返し暗誦していると、どうしても深層に10ヶ月体制があるように感じられることである。

これはカシオペア形が〈五つ星・W・4本線〉を意味し、それにより〈一日四潮〉の象徴にも十

分なりえることがわかって自信がわいてきた。すなわちカシオペアの星を〈止め〉と考えると、つないだ筋は 4 本で一日の潮の流れを象徴しうるのである。すなわち、〈止・引・止・満・止・引・止・満・止〉。

ここでまたまた学校理科による予断を脱構築しないとゆきづまるのであるが、この世の**恒常性**の象徴とは何か、ということである。学校では平均呼吸数 18、平均脈数 78 と教える。これでは末尾がおめでたい末広がりになっているだけである。野口晴哉はこれを〈一呼四脈〉とおいた。これにより私たちの身体は自然の潮汐活動の〈一日四潮〉と同じく〈四つで一まとまり〉になるように在ることこそが恒常性であり普遍の世界だという確信を得ることができる。これに対し学校理科が子供たちに強調しているのが同一性の世界である。それは関係ではなく存在の絶対化をもたらしやすい考え方である。それが太陽と月を分断する世界観へと子供たちを導く。

そのことを私は東京近郊の中学の朝練風景でも気づかされた。彼らは「1 2 3 4・2 2 3 4・3 2 3 4・4 2 3 4」を繰り返して走っていた。それは 4 を底とする繰り返しであると同時に量数 16 までをも導くことを可能ならしめる営為である。

恒常性	関係の持続
同一性	存在の持続

しかしさらに大きな数の必要の要請が、そのような恒常性の世界を突き破ったのである。そこからまず〈5・10〉の時代が始まったのである。そしてデカルトが言うようにそれはまず〈10〉から始まったと考えるのが合理的である。〈10〉より大きい〈12〉が先に生じたと仮構するためにはそれ相当の根拠が必要だが、より小さい〈10〉の方が先だと考えるのは「さざれ石が巖となる」現象だから、特別のことではないということである。言語学で言う「無標」を〈より小さいもの〉に当てるということである。

事実、現在 12 ヶ月体制にある英語では古層に 10 ヶ月体制があることは名前から容易に推量できる。日本語ではそれが見えにくいのは、国内の部派によっていろいろに飾り立てられてきたからである。それらを解きほぐして 10 ヶ月時代をイメージにしてみよう。

ポイントは 11 月にあって、それはボジョレー・ヌーボーの解禁日、感謝祭、そして新嘗祭の月である。つまり〈しも = NEW〉。だとすれば旧暦名〈神無月・霜月〉は〈上月・下月〉であったと仮構するのが歴史の一貫性からは妥当である。そうなれば日本語・英語とも、10 月に上がり、つまり最後と言う意味があったことになる。となれば〈神無月〉というのはむしろ〈神はゐ西〉というよりは単純に〈神は去にし〉を意味していたと考えるべきである。

英語		Sep	Oct / 8	Nov	Dec / 10
数名	8 月	9 月	10 月	NEW	12 月
旧暦名	は	なが	かんな	しも	しはす
意味	八		上がり	新嘗祭	初発

それは西方でも上方でもよいわけで、西方を直示すると仏教の含意が強くなるので〈出雲〉へと関連付けたものであろう。

	初夏	晩夏
恒星世界	野に降りたつ神	天にのぼりたつ神
惑星世界	神はゐこし (越)	神はゐにし (去)
近世	夏はきぬ (来)	神はゐ西

ただしここで注意しなければならないのは恒星世界では〈上下〉が対になっていて、切り離すことができないのに、惑星世界では〈去来〉や〈往来〉という対語だけでなく〈こす〉さらには〈わたる〉などの**非対**概念語が使われるようになり認識の相対化が進んでいることである。

#### 4、十二ヶ月の成り立ち

深層に10ヶ月体制のあることを、12ヶ月全体の中で意味づけるためには、日本の民俗からみると〈春〉が四回あることがヒントになる。ただし、春といっても現在の四季を前提とした春ではなく、古層にある二季時代、中国で言えば〈春秋〉以前の〈冬夏〉の時代のことを念頭において考えをすすめるなければならない。そのためにここでは、春は、初春から初夏までを視野に入れる。そうすると、初春の正月、春分の春、桜さく春、農事始めの4つあることがわかる。つまり〈官庁・春分・植物・暮らし〉の四つである。これは〈暦・天為・地為・人為〉とも読み替えられる。とすれば二季時代には秋も四つあったことになる。

次に、天武朝関係の書物から、〈きさらぎ・春分〉〈しよはつ・冬至〉と読み替えてもいいことがわかっている。さらに〈きさらぎ〉は〈きざはし〉〈ぎざぎざ〉と音韻相通するから〈カシオペア→十五〉と読み替えられると考えた。もちろん、〈しはす〉は〈しはつ→しよはつ→初発〉とよめる。

さらに、〈むつき・きさらぎ・やよい〉が〈六無・五十・四八〉と読み替えられると仮構してみた。そして、〈うつき〉は〈卯→五卯〉となり、さらに康熙字典の〈う・Wu・五〉とも繋がる。

難しかったのは〈五月サ〉であるが、これは田植えの民俗行事が五月であることより、農事の神事であるから〈スサノヲ〉にかけると〈四〉が導けるとした。

数名詞	正月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
神事								八朔		神はる西	新嘗祭	冬至
4つの二季	暦始		春分	初花	農始				秋分	農終	初霜	暦終
旧暦音韻	ム	キサ	ヤヨ	ウ	サ	ミ	フ	ハ	長	カミ	シモ	シハス
数よみ	無六	十五	八四	五	スサ四	三	二	始	最大数		下	初発
数象徴	∞	7	6	5	4	3	2	1				
ローマ暦		2月15日						August		8	new	10

宣長も評価した「やよい」という名称は、音韻イメージでは〈八四〉。次の「う」は康熙字典の元になった宋明以降の漢学を学んだ人々にとっては5番目を自動的に含意していたはずである。もちろんマージャン狂の人にとっても〈ウー・5〉は自明のはずである。

一方、蕪村の「菜の花や、月は東に、日は西に」の句も、学校国語では「うつくしい春の情景」という予断を刷り込むが、これは「春分」と「満月」が重なった特別な日を花卉4、おしべ6のアブラナによって寿いだ句である。その特別な日はローマでも「2月15日」として伝えられている。これは「春分の満月」を含意する。すでに見たように天武朝では、春分の日を「季春・きさらぎ」としていた。

もちろん西行の「ねがわくは花のもとにて春死なむ その如月の望月のころ」も同様の特別な日を指しているのであって学校国語が予断をすりこむ「桜と釈迦尊の死」の賛歌ではない。西行法師がご存知だったかどうかは不明であるが〈如月 へのつき〉ならば〈二月の満月〉であるから、ほぼ毎年起きる。だが、〈きさらぎ 季春〉では〈春分の日満月〉だから、略30年に一度しかおきない特別な日である。これはローマ暦でも特別な日であった。

さらにこれを補強するのが家康の八朔故事である。江戸城入場を「八月の朔」とおくことで、支配者の仕事始めが民衆の「二月の満月」の祭りとは対照的に新月から始まる故事を強調し、同時にユリウス暦の完成者であるアウグスツスと日本の暦法が〈八〉で通底していることを隠し顕わした。

これは家康の発明ではなく平安宮廷でも八朔の行事は大事とされていた。つまり二月・八月が春分・秋分に重なることはグローバル・スタンダードであることを隠し顕したのである。

以上を再度まとめると旧暦の月の名称が〈6ヶ月〉〈8ヶ月〉〈10ヶ月〉〈12ヶ月〉の時代を隠している事が見て取れる。ここで大事なのは暦の発達の過程では、当初現在の〈冬〉に相当する一定日数は名称を与えられることなく、それでも人々が存在自体は共有認識していたことである。現在の12ヶ月体制においても永らく「大晦日」が重要な年中行事として伝承されているのは、その外延性の記憶による。そして除夜の鐘の数は $108=27*4$ である。とすれば正味の暦は9ヶ月となり「きさらぎ」から「かな」までが正暦であることを含意する。これにより p 7 で仮構したカシオペアの数象徴 $9=〈止・引・止・満・止・引・止・満・止〉$ とも一致する。

	年始	年終	暦なし
6ヶ月制	さつき	上月	霜月・卯月
8ヶ月制	やよい	上がり月	季冬・季春
10ヶ月制	むつき	かな	二ヶ月
12ヶ月制	正月	12月	大晦日
除夜の108 衝き	$27*9$		$27*4$
13ヶ月制	きさらぎ	かな	4ヶ月

とすれば中国における〈孟・仲・季〉という四季のそれぞれの三分割は、それにより春分・秋分を〈仲〉に移したことが、「10ヶ月制」の底にみえてくる。

暦なし		やよい			みな			なが			しはす
季冬	孟春	仲春	季春	孟夏	仲夏	季夏	孟秋	仲秋	季秋	孟冬	仲冬
		春分			夏至			秋分			冬至

古田武彦がアジア地域の古暦における6ヶ月体制の可能性について言及しているが、厳密な暦が必要なのは農事暦のためであって、農事を行わない時期にも暦が必要になったのは奴隷制の定着によって一年中、奴隷の農事外の労働をも計量する必要が生じた後のことであろう。それでも厳寒の北方では最後まで一年中の総労働を計量化することは考えられなかったはずである。

また、そうであれば奴隷といえども個体の再生産には安息日が必要だとなり、週暦の導入が汎ユーラシアに確立したのである。その単位には少なくとも〈5・6・7・10〉の4種類があったわけである。それでもさらには安息日の開始が日の入りなのか日の出なのかは、汎ユーラシアにおいてながい年月の間、奴隷とその支配者の間では、重要な懸案事項であったはずである。

なお、〈初発〉は〈四八〉とも読み替えられる。とすれば逆語序対〈八四・四八〉は〈永遠・四方八方〉を含意することになる。そうすると似た音韻〈やおよろず〉は〈多層・多種〉を含意することに気がつく。それはさらに逆語序対〈やお・おや〉となって〈ややこ・親〉をみちびく。つまり日本の神々〈やおよろず〉の〈やお〉は、学校国語がいう〈多種多様〉や〈いろいろ・たくさん〉ではなく、系統をもったつまり、類ではなく一累を含意する。〈多種多様〉や〈いろいろ・たくさん〉は〈よろず〉が受け持つのである。そこから類をおなじくするものを扱う〈やおや〉と雑多なものを扱う〈よろずや〉の本義も導かれる。そして逆語序対〈<sup>ことお</sup>五十・十五〉は〈甸甸・月齡〉を含意する。

最後に、ここで「時間の量化」について補足すると、これも素朴時間量と帝国歴量という二つに分解できる。**素朴時間量**は縄をなう行為に伴う時間であり、それは肉体の疲労と生産物の量の対応から導かれる。時間の消費は満足とはセットになっており、終わりによって認識される。つまり認識から時間を見るならば、それはデカルトのいう「結果によって原因が認識される」という素朴因果律の世界である。それに対し**帝国歴量**は始めがあって終わりが無いことを前提とする時間量である。つまりオートマトンの世界であり「時間の矢」ともイメージされてきた。中国における王朝の興亡は帝国存続の下位要素でしかない。

日本ではそもそも王朝とか帝国という概念が希薄なので、国歌の中にある「さざれ石の巖となる時間量」が中国の帝国歴量に相当する。これは天為時間量ともいえ、中国のそれとはイメージが異なる。そして、「コケの蒸すまで」の句により「完了・初発」のイメージが随伴・喚起される。

中国の王朝の興亡に相当するのは日本では「遷都」である。これこそが人為の時間であり、「都は荒れはて新都は未だならず；鴨長明」「東京は年中普請中；夏目漱石」として簡潔に表現されてきている。これは素朴時間量とは異なり「始まりから終わりまでの繰り返し」。そのイメージは飛鳥時代以前は天皇の御世ごとに遷都が行われていたのであるから、「繰り返し」のイメージは「個人の一生」と密接に結びついて、その「終止・初発」のイメージは現在よりもはるかに鮮明だったはずである。

結局、漆黒の闇を失った現在の日本では「季節」だけが「繰り返し」のイメージを担保していることになっている。それを学校道徳は「四季の鮮明な美しい日本」という一つの予断だけで教条化しているが、実際の自然から隔絶してしまった都会の子供たちに説得力をもち続けるのは難しい。

## 5、七曜の成り立ち

いよいよ七曜の考察に入るが、ここまでの数象徴の翻案ではまだ読みとけない。〈日月星辰〉の読み込みができていないからである。

学校フェミニズムで平塚雷鳥の「元始、女性は太陽だった」という句を習ったとき、「なんか変」と思ったのだけどその正体がわからないまま還暦を過ぎてしまった。その時、日月は、分割できる対として捉えることができないという直感が働いたのであるが、これは四字熟語〈日月星辰〉をきちんとよめば解ることだった。これは〈渡る日月〉と〈降る星雨〉である。日月は確かに既に存在している海水の満ち干の原因であるが、星は雨同様に降るものであり、者物が浴びるものであった。日本語では〈降る・振る〉は同音である。

その重要な対比が「運行・振動」である。そして古代の賢者にとっての大事は星の瞬きと全天の周回であった。それは見える大星や日月によってではなく〈見えない極〉に支配されているのである。それは星が瞬くように息をする大極＝見えないけど存在する一体＝としてイメージされてきたのである。そのイメージを数象徴の考察と、七曜の成り立ちとしてまとめると以下の表が得られる。

	日月	星辰	数1	数3	数5	数7	数9	数0
六曜	明神；昼夜	太陰；潮汐	大星	三ツ星	五卯星	北斗七星	白鳥座	六無
七曜	太陽	月	火星	水星	木星	金星	土星	初発 4/8
英語	Sunday	Monday	Tuesday	Wednesday	Thursday	Friday	Saturday	
英語義	sole	mono	軍神 two	嵐神 W	雷神 three	four・five・full	農耕神	

白鳥座についてはここで突然登場したことに奇異を感じる人もいると思うが、七夕伝説の主役牽牛織女を結ぶ重要なメタファであり、数9の象徴としては、これ以外考えられない。中国の民間伝承によって〈惑星世界観〉以前の〈恒星世界観〉が根強く残されてきたと考えたい。と同時にこれにより〈X〉のイメージは白鳥座に割りあてられ、カシオペアから〈X〉のイメージが消され、〈W〉のイメージのみが残されるようになった。

〈牽牛織女〉を読み解くときには三つの可能性を念頭に置く必要がある。一つは民間に流通するイメージどおり男女の対と考えること、つまり恋人ならば〈牽牛・織女=5・コ〉であるが、古層には母子を従えている可能性も否定できないので、こちらなら〈織女・牽牛=.5・コ〉である。

となれば〈織女4〉は〈<sup>ほこ</sup>コ〉と読むことになる。

いずれにせよ、ここで「北斗」が通常「七星」と呼ばれる理由に思い当たる。これは「北斗四星」の時代が長くあったと考えるべきことを示唆する。とすると月の中にあるという「杵と臼」のイメージがすぐに思い起こされる。あるいは「風神と風袋」。あるいは「ものさしと升」「尺と規」「満月と二上山」もありである。これらには「杵と臼」を除いてSEXをイメージさせる力はない。

音	丸い	長い	音
うス	臼	杵	キね
かザ	風袋	風	ふう
じょうギ	定規	尺	しゃく
つき	満月	二上山	ふたかみ
かさ	円	直角	きざみ

三つ目は後世に発達した男尊男根主義によって作りだされてきた男独神のイメージにのっとった解釈である。その場合は〈牽牛7・牛頭9〉である。そして古事記の神代では〈七・九〉が登場しないことで対を作っていたことが思いおこされる。西洋でもダンテは〈ダンテ7・ベアトリーチェ9〉を神曲の中心寓意に据えている。これは西洋では恒星世界観時代が〈対神・北辰九星〉で象徴されるのに対し、惑星時代は〈男独神・北斗七星〉で象徴されることから来ていると考えると納得できる。〈対神・北辰九星〉の正座はそれぞれ〈5・4〉である。

だが日本では対座ではなく、〈青龍・朱雀・白虎〉のメタファに欠けたままの〈W〉のカシオペアの形を〈牛頭王〉の象徴とした。また、北斗四星の古層に升の部分が三角でよければ北斗五星という見方だ根強く教化されてきたと考えることも合理的である。そうすると〈北辰〉は〈M・W〉と対抗するタテ型〈M・W〉、すなわち〈Σ・3〉であった可能性が見えてくる。それは、漢字の〈了〉に近いイメージである。古層にある〈完了から認識される時間量〉、すなわち〈縄をなう労働の時間量=素朴時間量〉を含意する。中国ではさらに杵を付き返す回数としてイメージ化した。

	星座	月の餅つき	宵闇祭り	神曲	折口古代学	牛頭王
北辰十二星	対座(5+7)			12使徒・ユダ		
北辰九星	対座(5+4)	月数10	(月数9)	聖母子	月数10	
北斗七星	□V			ヨゼフ		牽牛
五星六筋	△△					
五星四筋	W・M		蓬莱山(W)		二上山(M)	牛頭王
北辰五星	Σ 3了	杵				
北斗五星	V▽					
北斗四星	□	臼	新月		大日	

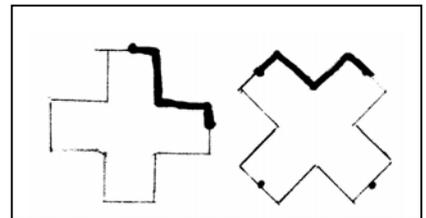
ここまで読み解くと、ようやく「牛頭王」の正体が判然する。男性神の古層にある〈二つの乳房をもつ地母神〉である。それは夜の帳においては古層に〈垂乳根・般若女面〉〈蓬莱山・二上山〉

などの二元系をもち、三元系〈のぼりたつ青龍・羽を広げる朱雀・おりたつ白虎〉を経て、最後に〈玄武〉が加わり四元象徴系として完成された。

	朱雀(M)・般若女面(M)・二上山	
野に降りたつ神	白虎 Σ	了 青龍
	玄武・垂れ乳ね(W)・蓬莱山	

しかしそれは六方体の世界を平面上に写し取るために、いくつかのイメージを並存させる結果となった。次章でその考察を行う。

だが、その前に思い出しておかなければならないのは古代中国でよく見られたという「亜字堂」のことである。あるいは西洋では「聖アンデレ十字」と呼ばれる「斜め十字」でもそうだが、幅広の十字形をを分解すると「4つのカシオペア」が得られる。現在の我々は「十字」というとすぐにキリスト教の十字架を思い浮かべてしまうので薩摩藩の「丸十」や「スイス十字」の由来も不思議に思っていたが、これらは四つのカシオペアを含意していたのである。



そのように考えると、結局、正十字が含意するのが「きざはし」で、斜め十字は「二上山」であることもわかる。そして、十字形に着目しても、「斜め十字」の方が「安定」のメタファとしては自然である。それは当然、自然の造物のほうが人工の造物よりも安定、つまり恒常だからである。

キリスト教の十字架が正十字でないのは、あくまで地面に埋め込まれて使われるものであることから来る。それによって、より安定して存在することができる。地面に埋める作業を必須とするならば、斜め十字の形は不合理そのものである。

## 6、イザナギ・イザナミの回り方の故事と十二支

ここでさらに方位と十二支が結びつくが、筆者の仮説を担保するのは古事記の逆回りの故事である。現在見かける十二支図は1月から時計回りに12月までまわる。そしてこれは南面正位としたときの惑星の運行と一致する。

	10月	11月	12月	
9月		ね		1月
8月	とり		う	2月
7月		うま		3月
	6月	5月	4月	

だが、これに星座を当てはめると〈北・7北斗七星〉〈東・5五卯星〉であるから反時計回りになる。これを3と5に相当するべき星座を入れて完成すると中段の図ができる。これを時計回りに読み上げるとすると大きい数から小さい数へとよみあげなければならない。

		7 北斗七星		
		子		
西	大西 1		卯	5 五卯星
		午		
		3 三ツ星		

このことが旧暦の名前の一部に大きい数からの列があったことと関係があるのかは現在はわからない。だが、全体として北面正位の恒星の周回は反時計回りであるから、古層の恒星時代は西から始まって反時計回りが順序のメタファであったと考えることができる。

さらに先の〈牛頭王〉との関連で考えると十二支は日本では最下段の図のように受け取られて

きた、あるいは民間にわかりやすく教化普及されてきた、と考えるのが合理的である。すなわち〈牽牛9・牛頭5〉に基づいて、地下人の象徴である〈いぬ〉に〈牽牛9〉をかぶせ、〈牛頭王5〉に〈み10〉をかぶせた。そのイメージを虚心に探るならば、それは〈角をもつ大きくて黒い動物〉である。

現存する種から探すならばバッファローか大鹿くらいしか筆者には想起できないが、歴史の知識を援用すればマンモスも有りである。それは、日本ではイノシシとして、かろうじて野生動物の威容をとどめているが、本場中国・朝鮮では家畜の豚となって人々の人気を集めている。しかも日本ではなぜかイノシシ母子の像が好まれている。野生動物の中で母性のリーダーシップを象徴するのはマンモスの後裔である象たちである。これは、偶然だろうか。

	10 ぬ	下月	初発	
9 いぬ		7 北斗		1 月
8 月	1 酉		5 卯	2 月
7 月		3 午		3 月
	6 月	5 月	4 月	

とにかく、このことは「戌の日」に妊娠のお祝いをする風習ともつながっているはずである。そして〈10 ぬ〉を〈上がり〉とする考え方も同時に教化できるのである。それは〈下月〉〈初発〉と言う漢字によってイメージを強化され、古い十ヶ月体制を記念することになっていたはずである。

もっとも少し前まで人気のあった桃太郎物語は少し違う布陣である。川から流れてきた桃太郎が牽牛で、これは〈人・1・11・ネ〉。鬼は牛頭で〈ぬ・10〉。そして地下人が三つの階層に分けられている。〈いぬ・9〉〈きじ・8〉〈さる・7〉。その含意は〈地下人の中の主・射手・歩兵〉であろう。歩兵上がりの秀吉の守護神は〈申〉。だがこれは右まわりの〈ending 上がり〉のお話である。

〈右回り begining〉ならば違う含意が見えてくる。整理しておこう。とはいっても下克上の世ならば桃太郎の方が右回りに上がっていた物語ということになる。

うさぎ	うま	とり	ねずみ
月	ヒルコ 日	M	W
日嗣の御子	臀上人	射手	地下人

と同時に行基作と伝えられる日本を取り囲む「龍図」のことも忘れてはいけない。この解釈キーによって天為である龍の進行方向は左回りだが、人為位階は上から読み上げていくのであれば右回り、ということになる。

さてもさても、ここまで堂々巡りをくりかえして、やっともう一つの解釈キーがみつかった。なぜ三つの語頭〈う〉、すなわち〈うし・う・うま〉が置かれているのかである。これは「1 2 = 3 + 9」を与える。これにより終始を〈とり・とら〉でそろえた含意も浮かび上がってくる。〈うし〉をのぞくと8ヶ月になる。

夏3 上下					月数9 去来				
		冬					冬		
		うし					うし↓		
晩夏	たつ		とら	初夏	M	とり	とら	う	W
	↑	う	↓			2	うま	2	
		仲夏					夏		

## 7、白虎と寅の関係

長い間、〈西の白虎〉と〈正月のとら〉との関連が不明で気になってきたのであるが、下の図からこのイメージは〈東西・南北〉の時代に出来上がったのであって〈東南西北〉をイメージさせる現在の十二支の姿からは意味が見えにくくなっていることがはっきりした。歴史の古層を探るときには、あくまで〈青龍・白虎〉の対だけを取り出し、〈朱雀・玄武〉とは混同しないように扱わなければならない。

	亥	11月	12月	
いぬ	玄武	ね	白虎	とら
8月	とり		う	2月
7月	朱雀	午・1/2	青龍	辰
	未	5月	4月	

さらにいえば〈白虎〉は現在の白色ではなく虎の地色、あるいは生成りの色をイメージしなければならない。〈白〉というイメージは〈青葉・紅葉・枯れ薄〉の組イメージが普及した後に、生成りが白へと転化されたものとする。それは染色漂白技術により「白色」が高価な人造物のメタファとなってからの慣習であろう。

この仮説は、〈亥亥〉〈未朱〉〈午干〉〈辰青〉〈寅黄〉の用字によって補強される。それぞれは次のように読みとける。ただし、漢字字典のように象形文字を全体のイメージ以外の要素によって、とりわけ部分の同一性を軸に分類する見方にとらわれていると以下の考え方は受け入れられない。さらに、五行思想における「五大色」にもとらわれていると受け入れられない。筆者も最初は得られた図表について、半信半疑であった。が『別冊 is-色；ポラ文化研究所』の中の福井勝義の報告によって、アフリカのある遊牧民における色概念には模様も含まれることを知って自信をもつことができた。二大模様は「縞・斑」である事はわれわれと変わらない。

亥亥	こと	黒点の大小	てんてん
寅黄	とこ・とら	条色黒・地肌色黄	しましま
未朱	とき・とり	未だ暮れぬ・もう暮れた	茜空・朝ぼらけ
辰青	そら	震える青という現象・存在としての青	星辰
午干	きざミ	五という現象・存在である十の半分	1 2の半分の6とその半分の3

さらにまとめると次の図表が得られる。補足すると〈黄土〉とあるのは中国の用字使用であって、日本人がみればただのほこりっぽい〈白土〉に過ぎなくても構わない。両者とも、ぬれば確かに黒くなる。そして〈dawn〉は英語では未明をさすわけだから西の空の茜色とは結び付けられない。

大地	無限に広がる黄土	黒い川筋
大字	無限に広がる空と海	白い雲と波
大明	茜色の dawn	薄闇の dusk
大玄	漆黒の闇	うばたまの黒

だが、西の空が茜色になるのは〈大日の down〉する時であるから、それは夕暮れを一日の始まりとする暦では〈もうすぐ新しい日付けがはじまる〉を含意して不思議ではない。

## 8、二つの二上山

日本では月は二上山の上に立ち上る満月像として表現されることが多い。これは北辰五星と北斗四星から得られるイメージである。それに対し折口古代学では、飛鳥の西方の二上山が大日、悲劇の皇子とともにモチーフになっている。とすれば西方の二上山は飛ぶ鳥の翼を隠し、それはそのまま白鳥となったヤマトタケルと大日の沈む西方浄土を含意することになる。これは折口自身が意

識していなかったとしても「古事記」言語共同体においては成立する。そのことは『古事記』を天皇中心史観の教条書として否定する共同体においてすら成立する。一方、日本人が『古事記』を否定も肯定もしない、つまり共有しない言語共同体を形成するようになれば、この含意はもうはや成立しない。

あるいは現在の二上山という名称も、政権が難波にあった時代の命名であったと考えることが合理的なのかもしれない。そうであれば二上山は折口古代学とは異なり「東方の二上山」のメタファであったことになり、その上にあるのは「出る満月」である。どうも日本語の深層を探るときには東経 136 度付近のそれよりも、難波以西の方言に参考になる事例が多いようである。

## 9、イシス神とは何か

さて、以上のように象徴としての北斗七星の古層に北辰五星と北斗四星が存在するという予断を確信すると、エジプト神話の象徴性も違った角度から見る事が出来るようになる。すなわち西欧人の予断を排した独創的な解釈が可能になる。

西洋では古代カルタゴに残るイシスの被り物を「階段上の椅子」と名づけている。これは日本語の〈ぎざぎざ〉〈きざはし〉と読みかえることが可能である。つまりはカシオペアないし北辰五星の象りなのである。そうであるならば古代エジプトで見られる「息子のホルス」の象徴性も素直に読み解ける。

息子のホルスは〈隼〉を被り物としている。だが、「太陽神レー」が三つの被り物、すなわち〈朝のフンコロガシ〉〈昼の隼〉〈夜の雄羊〉で象徴されることとあわせて考えるならば、ホルスは昼の象徴を取ったのであって、これは中国では〈朱雀〉となったものである。

現在の西洋では残りの被り物〈フンコロガシ〉〈雄羊〉を太陽の象徴として説明するが、素直に考えれば〈フンコロガシ〉の含意は〈だんだん、つまり序々に大きくなる〉であるから〈上弦の月ないし満月〉を象徴すると考えるべきである。あるいはまさに素朴時間量そのもののメタファである。日本では縄の長さが時間の長さのメタファとして自然に受け入れられてきているわけだが、歴史上のある時期に、デカルト流言語学派風に言えば、ただ一度の機会に、その長さが作り出す円環の大きさとしての象徴性を獲得したのである。それにより物量の概念が時間の長さとは独立に認識されることが可能になった。それはまた〈存在・在存〉〈事物・物事〉〈変化・移動〉〈用体・体用〉など認知言語科学が議論しているさまざまな言語事実の発生と軌を一にしている。

それは人類史上、ただ一回起きた事件だとしても、しばしば見失われ、忘れ去られていたものが他の文明との接触によって鮮明なイメージとしてよみがえるという事件の繰り返しとして現代の我々の中に生きている事件である。なぜならばそれは染色体遺伝子に起きたことではなく、あくまで文化遺伝子あるいはイメージ遺伝子というべき存在に生じた事件だからである。それは人から人へと教育と伝承、もっと言えば組織的な教化活動によって伝えられていくものである。教化活動が中断すれば遺跡や文書が大量にみつかったとしても、それらを作り使っていた人々の文化や中核イメージを復元するのが至難であるのは、そのためである。

あるいは教化活動が行き過ぎて人々の連想力や自由な発想を抑圧するようになれば一つの単語には一つの意味しか認められなくなり、社会の知的生産力は萎えきってしまう。それゆえに、他文化



との接触が、悲惨な戦争を伴ったとしても半面では社会の蘇生をもたらしてきた事実を説明する。

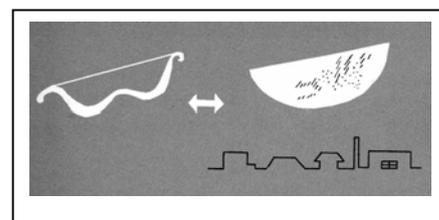
また、日本において持続帝期の人々が美しい三輪山に、とぐろを巻く大蛇のイメージを重ねていた事実が思い起こされる。そのようなイメージを通して人々は〈大きさ・高さ・長さ〉概念が同一外延であると同時に、概念操作する場合におけるそれぞれの混同がきびしく避けられていかなければならないことと、そのための**手続き（方法ではない）**を教化されたのである。それは〈くも・きり〉が同一外延であることと同様に、大切な言語の本質をさしていた。

さて、本筋にもどって考えると、識字教育にどっぷり浸ってきた現在の我々から見ると〈雄羊の両角〉こそはどう考えても〈新月〉でなければならない。とすれば西洋人考古学者が措定する「太陽神ラー」は、本来は「月齢神」であった可能性が濃厚である。事実、英語で月は、〈moon〉だけでなく〈luna〉とも呼ばれる。

と同時にそれほど識字教育の影響が強くない人々にとっては、〈フンコロガシ・雄羊の両角〉の対が〈物量・長さ〉の象徴対をなしていることを素直にみてとれるということも忘れるわけにはいかない。あるいは江戸時代あたりの文字を知らずに直示文法に生きた一膳飯屋の下女ならば〈茅の輪・注連縄〉を容易に連想したであろう。結論をいうと「イシス神」は「タラチネ」に重なると考える。

	現象↗	存在M	現象↘	存在W
エジプト(月齢本位)	フンコロガシ	はやぶさの頭	雄羊の頭	階段状の椅子／イシス神
中国(年周本位)	のぼりたつ龍	朱雀	おりたつ虎	玄武／亀甲紋
日本(春分夕本位)	満月＋二上山	二上山	夕日＋二上山	タラチネ
トランプ(物量本位)	三つ葉クローバー	赤いハート	菱・DIANA	黒いスペード
あめつちのうた	あめ土	ほし空	やま川	みね谷
能	シテ	般若女面	ツレ	女性(怨霊)

なお、ここまで来て児童向けの天文書『ジュニア 夏の天文ガイド』を見たら、上弦の月の説明に、和弓ではなくキューピットが持っているW字型の弓が使われていた。そういえば象形字〈弓〉もまたW字を彷彿とさせる。だとすれば歴史上のある時期の汎ユーラシアにおいて、月齢イメージとカシオペアの日周イメージが重ねられていた可能性は高くなる。



そうすると、年周のイメージも冬夏の二季時代から四季の時代に入るときに、どのような繋がりでも人々に教化されていたのかも凡そをイメージできる。

	大きい	存在M	長い	存在W
日周 ←	Σ	M	弓	W
月齢 →	満月	下弦の月	新月	上弦の月
一日 →	朝	昼	夕	夜
一年 →	初夏	仲夏	季夏	冬

さて、最後に『ガリバー旅行記』と『菊と刀』の著者らに敬意を表して日本語と英語を対比する。

日本語	さかる	かざる・笠	さがる	さぐる・よもつひらさか
さかさ	現象↗	存在M	現象↘	存在W
英語	stand up	sTARs	straight down	understand・RAT



党・下女に必須の文型となって確立した。

だが学校国語と学校英語は三つの中の〈を〉だけを、object 指示詞として認定したので、日本語教育も英語教育もわけのわからない状態が続いている。例文を表にする。当然、このように整理すれば〈わ・が〉は一番新しく登場した助詞対でそれぞれ吻音対〈ば・も〉と項音対〈が・ご〉の変形融合した形であり、その導入の時期は日本語に組織的にア段の音韻が導入された時期ということになる。その時期は半母音〈わ・や〉の対立が明確になった時期でもある。

その後、下層を、音韻対〈わ・を〉による標識〈主格・対格〉をもつ日本語陳述文の要が確立した。

項音	非文；勉強がする	非文；勉強ごする
cf	勉強さんがする	勉強ごっこする
舌音	勉強さする	勉強ぞする
吻音	勉強ばする	勉強もする
半母音	勉強やする	非文；勉強よする
半母音	勉強わする	勉強ををする
あいまい命令	太郎わ、勉強をせい	
上からの命令	太郎や、勉強をせい	
構文 1	太郎わ、勉強をバする	
構文 2	太郎が、勉強をバする	

現代日本語の分析で三元系が有効なのは命令形の場合である。文例は以下。

	強権的女性教師	ていねい体	強権的男性教師
Hold up!	—	—	手をあげろ
Raise your hand.	手をあげること	手を上げて～	手をあげろ

そして、動詞の中核機能が命令の授受にあるとすれば、動詞の語末変化の中核にあるのは動詞発声の相手を大きく三つに分類する発想である。そして古層で基準になったのは社会集団の中核たる主<sup>あるじ</sup>の発声形式であって、郎党・下女の発声形式は慮外である。

大事なのは、応答における「できる・できない」の明示が重要な動詞の機能であるが、ここで既に否定形は西洋言語学がいうところに「形容詞」になってしまうのであるからこのような機能分析の枠組みが破綻していることはすぐにわかることである。

さらに機能の場面ごとの実際の発声・発語を分析すれば、応答形式が諾否以外に可能不可能も必要になるのは、「主→郎党」関係における直接命令の場合だけで、間接命令の場合は伝令に徹することで可能・不可能判断を留保することができるのである。すなわち責任逃れが蔓延する宮中のような官僚組織における正式の応答形式からは「可能・不可能」の返答形式は排除されえるのである。

だが、郎党・下女などの実務者においてはまず大事なものは「可能・不可能」である。これは発声形式の中核にではなく発語の中核にくる概念である。この「可能・不可能」の発語形式を動詞分析の周縁に追いやって宣旨・奏上や祝詞などの発声形式を偏重してきた日本語分析の伝統が日本語概論や語彙分析を非実際的にしてきた大きな原因である。

さらに言うと、発語のもう一つの中核である願望表出もいわゆる形容詞なのであるから、形容詞

と動詞を分断した日本語用言分析が徒労に終わるのもこれ当然である。

	主→主上	主→客	主→郎党
直接命令	上様よ、鎮まり給え — —	客人よ、鎮まれよ いや、そうしよー いや、できないよ	おい、鎮まれ はい、そうします ちよつと、・・・
直接指示命令	太郎を、鎮め給え — —	自らを、鎮められよ — —	太郎を、鎮めよ (はい、すぐ鎮められます) (ちよつとでは、できません)
間接指示命令	太郎を、静かにさせ給え — —	— — —	太郎を、静かにさせよ はい、そう伝えます ちよつと、・・・
宣旨命令 (有無をいわず)	太郎は、静かにすること		
直接命令(古層よ・や)	神よ、静かになり給え	坊よ、静かにおしよ	坊や、静かにしーや
直接命令(対方発語)	静かになれ・静かにしよー (自他の分化)		
願望表出(再帰発語)	私は静かになりたい・自分を静かにしたい		

### 1 1、元始、女性は〈苧亡〉のメタファであった

最後に、あらためて主張したいのは、男女や日月を対立する対として捉えるものの見方は決して元始の特徴でもなければ古代の特色でもないことである。

文字化社会の産物である漢字の深層を探っていくと、中国では三叉矛を連想させる先の割れた、あるいは開いた武具のイメージが古層に強固に存在する。それに似た形を西洋では〈鋤すき〉という農具として、民間伝承では重要な象徴性を与えてきている。カルタゴの富裕層に好まれたのは三叉矛をもつネプチューン像でもある。それは英文字の〈W・M〉へと継承されているのである。

一方、古層の恒星世界観での男女のメタファは先に書いたようにいくつかの可能性があり、特定できない。わかっているのは、帝国の時代に入り権力の三分立が〈武・宗・権〉となったとき、五卯星は〈戊・矛〉など先の大きい武具の象徴となり武家に結び付けられた。それだけ大衆的人気が大きかったということである。権門家は四三星が含意する(ひしゃく)、を、そして宗門家は〈北極星〉を与えられた。

西洋では、五卯星の名前で金星が呼ばれ、女神のイメージを与えられていることは、西洋の五卯星に女性のメタファが後代まで伴っていることを含意する。だが、日本では廃用になった五卯はゴボウという名称として転用され〈長い・土中・ありがたい〉のメタファを得て本場中国韓国以上に日本の民間に定着した。

ただし、漢語の五卯星ではなく「ギザギザ星」あるいは「きさき座」という和名があったとすれば、それは〈きさらぎ〉〈きざはし〉〈きざし〉〈きさき〉となり、女性のメタファであった可能性は高くなる。

もう一つの考え方としては、五卯星はWoMb という存在語ではなく、水音・心音という現象語として受け入れられた。つまり逆語序対〈ごぼごぼ・ぼこぼこ〉として写し取られていったという見

方がありえる。日本語の成り立ちを考えると、この〈ぼ・ご〉対は重要な鍵となるはずである。そして漢字〈五・午〉は、わが国では古くから音韻〈ゴ・ウ〉を伴っているから〈womb〉が〈ゴ・ボ〉と写し取られた可能性は高い。

さらには疑似逆語序対〈ぎざ・さき〉からは、〈サケめという存在ギザギザ・サケるという現象〉も導ける。もう一つ、音韻相通からみれば〈ギザ→かさ〉をみちびくことが出来るから〈かささぎ〉や〈みささぎ〉も〈ぎざぎざ〉から導かれた可能性を否定できない。

一方、月との関連を見れば〈朔・望〉の中に音韻〈ボウ〉がしっかり生き残っている。現在は、武具〈兎〉は新月をさすが、歴史上は違っていたと考える理由が〈望月〉を見ていると思ひ浮かぶ。

〈兎・亡〉が対を作るとしたら、新月は〈亡〉でなければおかしい。これは古代の月齢の教え方が満月から始まっていたことから説明できる。それがあつた時期に入れ替わつて月齢の最初が〈亡・一五〉〈兎・三〉になつたのである。つまり〈兎→先の開いた武具→ボウ→満月〉と〈亡・新月〉の時代が古層にあるのである。だとすれば月は非光源のメタファではなく、繰り返される変化のメタファ、変化する現象のメタファであつたことになる。それは太陽や恒星のように単調に周回するだけの存在ではなく、〈成長する月〉こそが希望であり、素朴時間量のメタファ、あるいは労働と休息の繰り返しのメタファとして長く民間に受け継がれたことを意味する。そして、その古層には女性の受胎から臨月・出産のメタファがなかつたと考えるほうが不合理千万である。

しかし一方で、カイオペア座の日周にも、〈亡・たらちね〉〈上昇・龍〉〈兎・はんにゃ〉〈下降・虎〉というイメージを見ていた人々がいたのである。その人たちは戦争の技術すなわち logistics の担い手であつた。それが歴史の表面に出てくるときは不吉の時でもあつた。だが、彼らこそが 10 進法の担い手であり、汎ユーラシアにおいて永続する帝国暦量である十干とユリウス通日の管理を担うと同時に、庶民の祭りである〈きさらぎの望月〉の対位ににある〈八月の朔〉すなわち秋分の夜に、恒星が月に邪魔されずに最も長い時間、瞬きつづける夜を守つてきたのである。

だが、後代になつて、万物が見えない極の支配を受けているという観念が発達したときに、序と量が分離し民間においては労働の象徴としての量が、糸巻きが織女の手さばきで巻き取られて太くなつては、費消されては細つていくイメージに重ねられていったのである。それを残したのが〈丑・紐〉。だが、それら、世界の重層性は、惑星世界観の時代になつて、見えない極支配の時代から見える太陽神支配の時代が永く続くとともに忘れ去られていった。すくなくとも大衆教育の場である学校からは完全に焚書坑儒されてしまった。

## 12、全体のまとめと用語表

本論のような類推の仕方は、「富貴卑賤は同源」という日本語でも漢語でも英語でもよく見られる言語的事実をたくさん集めてあると、つまり枚挙してある人は納得できるが、辞書や文書頼みでしか言語を観察してこなかつた人は拒否反応をしめしやうい。あるいは「書物による学問」に対する、デカルトのいう「世間という大きな書物のうちに見出される学問」との違いである。つまりは方法の違いであるから、溝を埋めるには時間がかかるであろう。

たしかなことは、男系一統を是が非にも墨守しなければならなかつたのは征夷大將軍をいなく武門であつて、宗門にも権門にもその必然性はなかつた。徳川幕藩体制の太平楽が女性を畜生道以下に貶め、「丙午」のようなナチスのユダヤ人差別よりもよりも残酷で不合理で野蛮な価値観を世間に定着させてきたのである。そのような近世特有の偏狭な女性観が蔓延する社会は「たった四杯の上

喜撰」がなくても早晩崩壊せざるを得なかったのである。もっとも、早晩と言っても士族政権が倒れるには憲法上でも 1947 年を俟たなければならなかったのであるが、いつかは崩壊せざるを得なかった近世特有の偏狭な女性観が「非光源」である「月」を女性のメタファとして好んだのである。

それは徳川幕藩体制の中核が自分たちで男性性を占有して、天皇や公家に女性性を付与して来たからである。だからこそ、明治維新において統帥権を獲得した天皇の祖神から女性性を排除したいという運動が起きたり、それを阻止し、能の世界が守ってきた祖神の女性性を大事にしようという知識人の運動もおきていくのである。

だが、間違いなく、〈知と力〉〈文と武〉という二元世界では、男性には〈武と力〉が付されて、女性には〈文と知〉の象徴が付されてきたのである。もちろんそうでない見方も伝承されてきた。そのことは日本のある地域ではカシオペアを「いかり星」と呼ぶことから確信することができた。「いかり星」は、太安万侶が拝した「いかずち」と通底している。それは書物の学問に対抗する実学の守護神のメタファとして地下人の信仰を保障してきたものであろう。その逆語序〈かい〉は「匙」と「匕首」をあたえ、「武門・権門」を含意する。

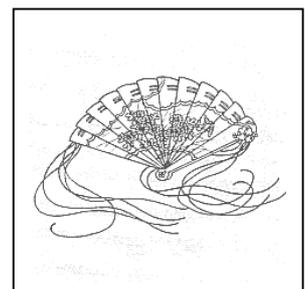
この「いかり・いかずち」からは、さらには日本語のいくつかの〈逆語序対〉がきれいに導かれる。このような語対を構造化するとソシユールのいう単語と意味の結びつきの恣意性の深部には、音韻イメージと視覚イメージの強固な結びつきがあることが見て取れる。ただし、その結びつきは辞書のような固定されたものではなく「ずれ・ずらし」を伴うゆるい固定である。だから変化の途中が抜けて、missing ring を復元できないと、単語のもっている意味の広がりが見えなくなる。

長さ	北辰五星	いかり		烏賊	いかにだ	いかずち	視覚	長い
大きさ	北斗七星	匙	匕首	貝	櫂	なるかみ	聴覚	永い
	聴覚	うた	—	いかにだ	かた	いがぐり	とげがある	
	触覚	あた	あい	いた・ふね	はだ	(はま)ぐり	つるつるする	

上のような表＝対構造が、言語や認識の本質であるということの人々に教化するのに最適なイメージは何かと考えていくと日本人ならば「扇」をまず思い浮かべるのではないだろうか。中古においてはそれは女性が持つものであって、男権の象徴であったことはない。

だからこそ武門の総大将・徳川家康は公家衆には学問のみを奨励し、天皇家の祖神であるアマテラスの女性性を強調したのである。もちろん武門といっても藤原摂関・徳川幕藩体制下の「士」は文武両道が大前提である。

だが、一方で思い出しておきたいのは現在汎用されている扇子は中世あたりから、つまり廉価な紙が供給されたり、般若女面を伝承する能の世界において必須の小道具として登場するようになってからのことであり、雛壇のお姫様は中古から「檜扇」を手にしてきた。だから扇子にイシス神の面影をみたとしてもそれは中世以降の地下人の習俗と考えたほうがよい。しかし伝承は、このようなイメージの「ずれ・ずらし」をとおして行われていく時に確かな伝統となるのである。



差別を克服するためには、差別する側の用意したイメージの反義語や転倒を振りかざすだけでは

駄目である。差別の構造を根底から明らかにすることが求められる。

女性差別は帝国の発生、あるいは帝国史を書記するための永続する時間量概念、すなわち帝国歴史とともに生じ、発達してきたものであるから、書記発生以来の歴史のすべてを一つ一つ検証する作業抜きには克服できない。100年前の雷鳥女史を礼賛しているだけでは科学が担うべき使命を全うすることはできない。雷鳥女史も我々も歴史の通過者にすぎない。科学がノーベル賞の一覧ではなく、運動に過ぎないのと同じことである。

このことはまた、我々が優れた先人から学ぶべきもの、学ぶべき方法も一新されなければならないことを帰結する。すなわち、先人の業績をそれぞれ単独で意味づけることは出来ないということである。その先人が歴史上のどの時点で、どの部族部派に属していたか、すなわち先人を取り巻く【地】を抜きには先人の業績という【図】の意味を理解することは出来ない。

しかしながら、それでは先人の【地】といっても、言うは易く実行は難しい。結局、【地】を担保するのは【図】でしかないことに思っていた。とすれば、個々の優れた先人がどのように認識したのか、あるいは認識すべきだと考えたのかという【図の総和】からしか、我々は汎ユーラシアへの旅立ちを始めることも続けることもできない。しかし思い切って旅立つならば、一貫した方法によって得られる「繰り返されるパターン」に導かれてはるかな歴史の古層へと至ることができる。

なお、本論で「丙午」の語源を得たいと考えてきたが、果たせなかったのが今後の課題とする。課題が解決した時には汎ユーラシアにおける明神信仰の中核には「わたる日月」ではなく、「めぐるカシオペア座」のイメージが強固に存在することを、いっそう明確に取り出せると考える。

用語のまとめ				
認識法	対比	(4 * 4)本位・(5 * 2)本位		(6 * 10)本位・(5 * 12)本位
時間の単位	昼夜・二季	日周・月齢・年周		週暦(六曜・七曜)
中核イメージ	明神	恒常・見えない極		物神
量序概念	素朴時間量	量序および大長のそれぞれの二元化		永続する帝国歴史
時間概念	繰り返し	一日四潮	恒星時間(トキ) / 瞬く星(マ)	惑星時間
数象徴	—	正数4	北辰五星・北斗四星	正数6・北斗七星
恒常の象徴	終止・初発	W大地・M天空		天神・地祇
神王	母王・王母	母子対神・男女対神		男系一統
神官	巫女	三殿形式(古くは、親神+姫神)		男独巫

辺境1	中心史観	辺境2
北陸	日本(やまと)	南海
北狄・西戎	中国	南蛮・東夷
アッシリア	インド	中国
インド	アッシリア	エジプト
アッシリア	エジプト	ナイル上流
アッシリア	カルタゴ	エジプト
騎馬民族	ローマ帝国	地中海
北方海賊	イギリス	ローマ帝国